

実践事例

(その他) 城北中学校 1年

城北中の不思議に込められた思いを調査しよう

9月～3月(35時間)

1 ねらい

城北中学校には、たくさんの「城北中ならではの」のものがある。例えば、大ねずみグループと呼ばれる花火大会後の河川美化活動である。八月の花火大会の日の翌日、全校生徒が朝早く集まって乙川河川敷の清掃を行うのだ。すでに城北中の伝統となったこの取り組みは、いったいなぜ始められるようになったのだろうか。

このような「城北中ならではの」の活動や行事について調べ、そこに込められた先人の思いや活動の意義を知ることを通して、学校生活や行事活動に主体的に取り組もうとする態度を育てていきたいと願い、本実践をはじめた。

2 実践の概要

【実践① 一分不動について考えよう】

城北中の来賓玄関には、ひと際目を引くワニの剥製がある。なぜワニの剥製があるのかと問いかけると、伊賀川で捕獲されたと答える生徒もいる。約50年前の城北中でそのワニが飼育されていた事実を伝えると、生徒達からは驚きの声が上がった。

身近な不思議を出発点に、生徒が普段の生活の中で感じる不思議を聞いてみた。「使ってはいけない階段のこと」や「1段だけ低くなっている階段のこと」などとともに、「一分不動」についての意見が出た。城北中では、授業が始まる一分前に生活委員の号令によって「一分不動」が始まる。椅子に深く腰掛け、姿勢を正し、目をつむる。一分間の沈黙ののちに、授業が始まる。当たり前に行われているこの取り組みも、一年生の生徒達にとっては、ただやらされているものでしかなかった。

一分不動について、どのような経緯で始められ、また先輩達がどのような思いで行ってきたのかを伝えると、

「一分不動がいい加減になることがあったけど、城北の伝統を守れるように一分不動をきちんとやりたい。」

「学力や体力を上げるためにも、姿勢よく一分不動をやりたい。」

といった前向きな感想を記述する生徒が多く見られた。

【実践② 城北中の不思議を調査しよう】

前時までに生徒から出された城北中の不思議をもとに、各自が追究するテーマをひとつ決めさせた。城北中には、城北中のこれまでの歩みをまとめた「城北の歴史」や開校からの城北中の出来事や実践をまとめた「学校づくりの話」という本がある。始めは、これらの本を使って追究テーマの調査を始めた。

「ねずみグループが、一人の生徒のボランティアがきっかけで始められたことを知って、私も学区をきれいにしたいと思った。」

「無人購買は、生徒同士の『信じ合う心』の証だと分かった。無人購買を正しく利用したい。」

「暁天かけ足には、50年以上の歴史があると知った。この城北の伝統を大切にしたい。」

調査を始めると、活動の由来や歴史を知ったことで、活動に前向きに取り組みたいという記述

が増えていった。しかし、本で調べるだけでは、得られる情報にも限界がある。「当時の城北中生は、どのように一分不動に取り組んでいたのだろうか。」「ねずみグループを始めた人は、どのような思いで始めたのだろうか。」など、生徒の中には、さらなる疑問が生まれていた。そこで、30年前に城北中に勤めていた校長先生をゲストティーチャーに招いたり、ねずみグループがはじまったときに城北中生だった学区の方に質問の手紙を送ったりして、さらなる調査を行っていった。

「入試前でも自分で一分不動をする先輩がいるくらい、一分不動は大切なものだと分かった。」
「ねずみグループを始めた人のように、自分の学区は自分の手できれいにしたい。」

調査後の生徒達の記述からは、疑問が解決されたことで、活動への思いを一層強くする生徒の変化を見取ることができた。

【実践③ 調査したことを伝え合おう】

調査が終わり、生徒達は追究テーマごとのグループで、まとめの活動を行った。まとめが終わってから、それぞれが調査したことを全員が共有できる機会を作るため、学年での発表の時間をとった。



← 体育館での発表会の様子



← 無人購買について発表する生徒

すべての発表が終わった後で、感想を交流する場を設定した。ある生徒は、「城北中の行事には、それぞれ熱い思いが込められていることが分かった。その思いを大切にしながら、これからの学校生活を送りたい。」

との感想を述べた。テーマの追究や伝え合う活動によって城北中の不思議に込められた人の思いを知ることによって、今まで以上に行事やさまざまな活動に前向きに取り組もうとする生徒達の変化を見ることができた。



↑ 感想を発表する生徒

3 実践を振り返って

城北中には、50年以上も続く伝統的な取り組みが多くある。しかし、歴史があることが伝統になるのではない。その取り組みに対する生徒の思いと努力が伝統をつくっていく。

ある土曜日に、1年生がねずみグループの活動で学区の清掃を行った。30分間だけの予定が気付くと60分間が経過していた。休日の登校にもかかわらず、黙々と清掃活動に取り組む生徒達から、城北中の伝統を受け継ごうとする熱い思いを見ることができた。「城北中ならではの」の取り組みについて調べ、城北中の伝統を作ってきた人たちの思いに触れたことで、生徒達は「城北中ならではの」のものを「城北中の伝統」として捉え、前向きに取り組みたいという思いを一層強くすることができたようである。